

ゾルゲ事件 とは何か

チャルマーズ・ジョンソン
篠崎 務〔訳〕

岩波書店

解説

加藤哲郎

本書は、Chalmers Johnson, *An Instance of Treason: Ozaki Hotsumi and the Sorge Spy Ring*, Expanded Edition, Stanford University Press, Stanford, California, 1980 の日本語訳である。原書の初版は、一九六四年七月一日に米国スタンフォード大学出版局から刊行された。ちょうど旧ソ連でリヒアルト・ゾルゲの存在が初めて公式に認められ、ソ連英雄勲章が授与される直前である。だから一九九〇年の増補版刊行に当たって、著者チャルマーズ・ジョンソンは、「ソ連が遅ればせながらゾルゲを認めたことを初めて知った私は、ひよつとしたら確かにソ連でゾルゲ事件が公式に認知される前に、日本で刊行されたばかりの警察・裁判資料『現代史資料 ゾルゲ事件』一―三巻(みすず書房、一九六二年)を読み込み、六〇年代初めまでに出ていた英語・日本語の文献・資料を可能な限り参照して学術書にまとめあげた本書は、本書の後に英語で刊行され、先に岩波現代文庫に収録された英国のデイーキン・ストリイ『ゾルゲ追跡』(F. W. Deakin and G. R. Story, *The Case of Richard Sorge*, Chatto and Windus, London 1966)と共に、英語圏での第一次史資料にもとづく学問研究として

一定の評価を得てきた。

ただし一九六四年のソ連におけるゾルゲの名誉回復については、本書の底本とした一九九〇年増補版刊行の翌年にソ連邦そのものが崩壊・解体し、今日のゾルゲ事件研究の新しい基礎となるロシア側の第一次史料が出てきた。ジョンソンの著作刊行がソ連でのゾルゲ名譽回復のさいに参照された形跡はなかった。キューバ危機後の米ソ冷戦と、ソ連におけるフルシチョフからブレジネフへの権力移行の政治力学の産物だったA・G・フェンシユン「秘録ゾルゲ事件——発掘された未公開文書」、白井久也編著「国際スパイ・ゾルゲの世界戦争と革命」社会評論社、二〇〇三年、所収、参照。それでもジョンソンのゾルゲ事件研究が、学術的な意味で先見性があったことに変わりはない。それまで日本でも世界でも、ゾルゲ事件関係者の回想・証言、小説・ドキュメンタリー・エッセイは多数出ていたが、実証的な学術研究としてゾルゲ事件を論述したという意味では、本書が初めての著作であった。

一九九〇年増補版のジョンソンは、日本のゾルゲ事件研究にも触れている。ソ連が六四年に突如ゾルゲの名誉回復を行った背景に、日本における六二年「現代史資料」公刊と、それを新しい視角から評価する『歴史学研究』六三年四月号の歴史学者藤原彰の書評を見出して、日本のマルクス主義史学がゾルゲ・尾崎の共産主義者としての活動を高く評価したことに、それまでのGHQ参謀第二部(G2)部長ウイロビーによる反共的スパイ摘発調査報告福田太郎訳「赤色スパイ団の全貌——ゾルゲ事件」東西南北社、一九五三年)や、尾崎秀樹・松本清張ら

の日本共産党伊藤律を「裏切り者」として告発する類の書物・回想とは異なる、ゾルゲ事件研究の新たな条件を読み取った。つまり、本書初版の一九六四年の時点で、日本でも広く受容されていた米軍ウイロビー報告の信憑性を疑い、ゾルゲ事件発覚伊藤律端緒説に距離をおいていた。「付章 伊藤律はユダだったろうか？」まで書いて、尾崎秀樹の伊藤律「生きていたユダ」説(八雲書店、一九五九年)、松本清張の「革命を売る男」説(日本の黒い霧)文藝春秋社、一九六〇年)に疑問を呈していた。

この問題は、伊藤律が中国での二七年間の幽閉を解かれ、一九八〇年に日本に生還することにより、伊藤律自身の証言と、それにもとづく再調査によって、初版本でのジョンソンの疑問が解かれることになった。これが、六四年初版の末尾に「追補」Reprise, 1990——もともと音楽用語でソナタの再演奏——を三〇頁近く加え、九〇年に増補版を刊行する大きな理由となった。

米国の歴史研究者が、戦前、特高警察の筋書きとそれを利用したウイロビー報告を鵜呑みにした尾崎秀樹・川合貞吉らの伊藤律発覚端緒説、日本共産党の党内抗争の産物である伊藤律GHQスパイ説を広く普及させ通説にまで仕立てあげた松本清張「日本の黒い霧」の「革命を売る男」説に異議を唱え、伊藤律の「奇蹟の生還」と帰国後の証言をもとに増補改訂したのが本書である。日本では渡部富哉「偽りの烙印——伊藤律・スパイ説の崩壊」五月書房、一九九三年が、官憲史料・裁判資料の批判的解説と伊藤律自身を含む執念の聞き取り調査から通説を批判し、伊藤律発覚端緒説を大きく揺るがした。それと並行して、米国では本書が、

日本の通説を再検討していた。

そして、二一世紀には通説の変更となり、二〇一三年には松本清張『日本の黒い霧』の発行元文藝春秋が、伊藤律の遺族の抗議を容れて、文豪推理作家の書物に「断り書き」を入れるという異例の事態になった。尾崎秀樹が全面的に依拠し、松本清張も典拠としてきたゾルゲ事件被告川合貞吉の証言が、GHQ参謀第二部長ウィロビーへの情報提供者として月二万円をもらつての諜報工作にもとづくものであること、「革命を売る男」とは伊藤律ではなく川合貞吉であつたことが、米国側資料によつて明らかになり証明された(NHKのニュースをはじめ多くのメディアで報じられた、「東京新聞」二〇一三年五月二十八日夕刊参照)。この点でも、ジョンソンの本書は先駆的だつた。

本書の日本語訳は、一九六四年初版本を底本とし、萩原実訳『尾崎・ゾルゲ事件——その政治学的研究』と題して、一度出版されている。「はじめて外国人によつて書かれた本格的な尾崎・ゾルゲ事件の分析」と銘打つて、一九六六年三月、弘文堂から刊行された。弘文堂訳に寄せられた「六五年一〇月香港にて」と記したジョンソンの「日本語版に寄せて」は、本書誕生のきつかけを、次のように記している。

私は偶然の機会に、尾崎秀実の名を知るようになった。一九六一年と六二年に東京に住んで、かつての日本陸軍の資料をもとに、日中戦争中の華北における中国共産党の勢

力伸長に関する本を書いていた。そこへ大変親切にしてくれた目黒の村田書店の主人が、尾崎秀実の『現代支那論』をすすめてくれて、これを読めば、中国の政治、社会史を書いたすぐれた著作だと思ふに違いないと、私に言つた。

このとき私はまだ、この本の著者がいったいどんな人物なのか知らなかつたが、一読して、そのすぐれた点や客観性に驚いてしまった。さらに驚いたことは、このような本が一九三九年の日本で書かれ、しかも著者がゾルゲ・スパイ団の一員として、絞首刑に処せられたことだつた。……

尾崎を研究した結果、中国革命に対して、彼は日本で最も理解力にすぐれ、正確な観察者の一人であり、日中戦争の悲劇が彼の生涯に反映されていると私は考えた。この戦争の影響は、今日ですら極東全域を覆う不安定な政治情勢のなかに感じとることができ、私は尾崎の人物論を通して、多くのアメリカ人が知らずにいる、もつと重大な問題を伝えたい、また一九五二年に発表されたウィロビー將軍の扇動的な連合軍最高司令部報告(SCAP Report)の誤りを正すことができたいと願つた。

つまり英語圏の多くの類書と違って、ジョンソンがまず注目したのは、ソ連のマスターズ・ソルゲではなく、「第二バイオリン」として扱われてきた日本人尾崎秀実とその中国革命論だつた。「尾崎とリヒアルト・ゾルゲを単純にスパイと考えるなら、彼らほど知的なスパイは現代史上ままずいだろう。二人とも金が目当てでのスパイなどではない。その動

機は政治的なものであり、二人を見れば尾崎の方がより洗練されており、一層大胆でもあった。尾崎が日本にとって「叛逆者」とされたのは、日本が自らぶち上げた東アジアでの運命論〔大東亜共栄圏〕を実現し損なつたからである〔本書五―六頁〕というユニークな視角があつた。このことが、ウイロビー報告や尾崎秀樹「ゾルゲ事件——尾崎秀実の理想と挫折」〔中公新書、一九六三年〕のスパイ活動中心の記述に比して、やや異端の印象を与えた。またディーキン「ストーリー」『ゾルゲ追跡』のオーソドックスでバランスのとれた実証研究との対比で、各論的な印象を与えることになつた。

さらに弘文堂版日本語訳では、学術研究では必須な原書の注解・典拠が省略されていた。ちようど尾崎秀樹や松本清張の書物の普及、ソ連からゾルゲの英雄物語が続々刊行され邦訳された時期と重なつて、アメリカからの「説み物」の印象を与えたことも、日本で本書の評価が定まらなかつた一因になつた。だが、その頃著者ジョンソンは、中国民衆の抗日戦争・中国革命と重ね合わせて、ベトナムの民族解放運動とアメリカの軍事的介入の帰趨に注目していた。

本書が「忘れられた名著」となつたもう一つの理由は、著者チャルマーズ・ジョンソン自身のその後の学問的活躍の場が、ゾルゲ事件とは縁遠い領域であつたことである。日本政治研究者としてのジョンソンは、当代日本を「発展志向型国家」として官僚制と産業政策による経済成長に注目した「通産省と日本の奇跡」〔MITI and the Japanese Miracle, Stanford UP、

1982, TBSブリタニカ、一九八二年で、脚光を浴びた。ちようどエズラ・ヴォーゲル「ジャパン・アズ・ナンバーワン——アメリカへの教訓」〔TBSブリタニカ、一九七九年が七〇万部のベストセラーになつていた時期に、ヴォーゲルとは異なる批判的視角で「日本の成功」を論じた。日米経済摩擦におけるいわゆる「レヴィジョニスト」、対日強硬派として著名になり、その学問的ルーツよりも、時局への発言で知られるようになった。

しかも、本書収録の「日本語版に寄せて」でシーラ夫人が触れているように、カリフォルニア大学パークレー校准教授をつとめながら、ベトナム戦争さなかの一九六九年から七三年まで、ジョンソンは中国専門家としてCIAの国家情報評価部顧問になつていた。エドウィン・ライシャワーら米国親日派の日本研究主流から「レヴィジョニスト」よばわりされるばかりでなく、ジョン・ダワーらベトナム反戦世代の若手日本研究者からも「CIAの手先」として警戒された。本書初版は、ジョンソンがCIAによつて登用されるもになつた業績の一つであつた。

しかし、著者がその後もゾルゲ事件への関心を失わなかつたことは、本書の「追補」によくしめされている。二〇一〇年に没するが、冷戦崩壊・ソ連解体以後になると、ジョンソンは「アメリカ帝国主義」とそのアジア政策を批判する急進平和主義者として知られるようになった。遺作となつた「帝国解体——アメリカ最後の選択」日本語訳の帯には、「普天間基地を返還し、アメリカ帝国は解体せよ——知日派、そしてCIAや米軍の内情に詳しい著者による渾身の遺著」と記されている（雨宮和子訳、岩波書店、二〇一二年）。

ジョンソンは、日本の高度成長の秘密のアナリストとしてばかりでなく、アメリカ軍産複合体やCIAに対する批判者として生涯を終えた。そのためか、一九九〇年に本書の増補版が刊行され、多くの大学図書館等に入っても、ジョンソンの時評の著作は次々に翻訳されたが、著者のCIA時代に連なる本書が注目されることはほとんどなかった。

しかし、二〇〇〇年の著作 *Blowback* 邦訳「アメリカ帝国への報復」集英社には「帝国を支えてきた私」という自己批判めいた序論があり、「残酷な文化大革命に幻滅した中国専門家にとって、日本は社会主義が成功した国家の特例のように見えた」と書いているところを見ると、処女作 *Pasani Nationalism and Communist Power: The Emergence of Revolutionary China, 1937-1945* 邦訳「中国革命の源流——中国農民の成長と共産政権」弘文堂新社、一九六七年」と本書が、その後の著者の研究を方向づけたと思われる。CIAと関わった過去については、マーク・セルデン、ブルース・カミングスら米國アジア研究左派の疑問と批判に答え、「CIAと私」(「The CIA and Me」, *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Vol. 29, No. 1, 1987) を公表し、率直に当時の事情と実際に行われた活動実態を述べていた。

本書は、アメリカにおけるゾルゲ事件の一般的イメージ、一九五〇年代マッカーシズムの中で定着したGHQ参謀第二部長ウイロビー報告(邦訳「赤色スパイ団の全貌」東西南北社)に疑義を唱えた研究として重要である。一九四九年二月に、戦後東京でのG2ウイロビー少将(CIS(民間諜報局)ポール・ラッシュユ中佐(日本では「アメリカン・フットボールの父」清里の父)として知られる)の調査をもとに、米國陸軍省がゾルゲ・スパイ事件の全容を発表したのは、冷戦の始まった米國での反共「赤狩り」の一環だった。ウイロビーの狙いは、日本でのゾルゲ・スパイ団のルーツが一九三〇年代初頭の上海にあり、そこでゾルゲ、尾崎秀実と共に、米國人作家アグネス・スメドレーがソ連のためにおこなっていた「非米活動」を告発することだった。アメリカの反共マッカーシズムは、一九四五年六月のアメリカ事件を先駆けとし、四七年のハリウッド映画人「赤狩り」、四八年アルジャー・ヒスら國務省職員告発、五〇年に原爆製造マンハッタン計画のクラウス・フックス摘発やローゼンバーグ事件と、すでに始まっていた。

アグネス・スメドレーとゾルゲ・グループのつながりを証言できる「唯一の生き残り証人」とされたのが、「支那浪人」として尾崎秀実のもとで情報収集していた川合貞吉だった。ワシントンの陸軍省発表は、スメドレーの強い抗議によりいったん「手違い」とされたが、東京のウイロビーは反発して、川合を本郷ハウス(G2キャンソンの機関)に軟禁してスメドレーや伊藤律についての諜略情報を集め、一九五二年にマッカーサー元帥の序文付きで決定版書物に仕立てた時、アメリカでのタイトルは *Shanghai Conspiracy* (「上海の陰謀」) となっていた。日本共産党の分裂にも関係した川合貞吉証言は直接には使われなかったが、五〇年五月に亡くなったスメドレーの他、中国革命に共感するアメリカ人ジャーナリスト、エドガー・スノー、アンナ・ルイス・ストロンングらをターゲットにし、在外米国民の「非米活動」を告発しようとした。

このウイロビー報告の延長上で、GHQ/G2歴史課でウイロビーのもとで活動したメリランド大学ゴードン・ブランゲ教授(占領期日本言論出版物のコレクションであるブランゲ文庫の収集者が、一九六七年「リーダースタディエスト」一月号誌上に「マスタースパイ」(日本語版は二月号「世紀のスパイ・ソルゲ」を發表した。没後に「Target Tokyo」(McGraw-Hill Book 1984、千早正隆訳)「ソルゲ 東京を狙え」、原書房、一九八五年)と題してまとめられたが、基調はウイロビー報告を継承していた。川合貞吉へのインタビューや石井花子(ソルゲの東京での愛人)、荒木光子(G2歴史課のアメリカ側責任者ブランゲの相方である日本側責任者荒木光太郎元東大教授の夫人で、実質的に歴史課を動かした)らの証言で彩りをそえ、アメリカにおける支配的なソルゲ事件イメージを増幅してきた。

ジョンソンの本書は、分析の焦点を、ソルゲでもスメドレーでもなく尾崎秀実の中国革命論に定め、ソルゲについても尾崎についても、その一九三〇年代の知的活動を高く評価した。資本主義対共産主義のイデオロギーばかりでなく、アジアの民族解放の問題のなかにソルゲ諜報団の活動を位置づけた点で、ウイロビーやブランゲによる「マスタースパイ・ソルゲ」のイメージとは異なるソルゲ事件像を提供している。

ジョンソンの尾崎・ソルゲ論は、アメリカでは異端であったが、日本では一つの有力な見方の延長上にあつた。敗戦直後の日本で、尾崎秀実の獄中から家族へのヒューマンな手紙「愛情はある星のごとく」がベストセラーになり、尾崎の活動を基軸としてソルゲ諜報団は

反戦・反ファシズムの流れの中で評価された。ジョンソンの研究は、「尾崎は愛国者であつたか、売国奴であつたか」と論争された時代の日本的イメージを踏襲していた。

ただし日本でも、四九年二月米国防軍省ウイロビー報告発表に伴つて、ソルゲや尾崎がソ連赤軍のスパイであつたこと、事件発覚の端緒が当時の日本共産党農林部長伊藤律の「裏切り」であつたことなどが大きく報じられて、戦前特高警察の作つたシナリオにG2ウイロビーの反共主義が加わつた物語が広がつた。折からの東西冷戦、中国革命・朝鮮戦争、日本の逆コース・レッドパージ、それに日本共産党のコミンフォルム批判を契機とした党分裂と極左的戦術によつて、「ソ連のスパイ」というイメージが拡大していった。

日本共産党は当初ソルゲ事件とは無関係と主張したが、いわゆるコミンフォルム批判で「占領下平和革命論」がソ連・中国の共産党から批判されることにより、分裂・内紛によつて、事件そのものとは別の政治的色彩を帯びた。伊藤律のソルゲ事件との関わりが党内で再調査され、「スパイ」と断定された。いわゆる六全協での分裂回復後も、野坂参三ら「北京機関」の要請で伊藤は中国共産党に身柄が預けられ、中国の監獄に二七年間幽閉された。

一九六二年にみず書房「現代史資料」シリーズ第一弾として警察・検察・裁判資料「ソルゲ事件」が刊行されて日本での学術的研究の基礎条件は整つたが、戦前官憲資料やウイロビー報告を根底から疑い、尾崎秀樹や松本清張のドキュメントに挑戦する研究は現れなかつた。それは、一九八〇年の伊藤律の帰国後も、八九年の冷戦崩壊まで続く。

他方で、一九六四年秋にソ連がソルゲを「大祖国戦争の英雄」として突如「名誉回復」し、

ソルゲ諜報団を顕彰する書物が刊行され、日本にも紹介された。東ドイツのユリウス・マード「ソルゲ事件の真相」(朝日ソノラマ、一九八六年)を含め、日本の官憲史料では知ることのできない事件の国際的広がりが見えてきた。ただしその情報公開は断片的であり、冷戦下のKGB等ソ連情報機関の増殖と結びついていた。ソ連・東独の研究は、モスクワとつながる東京のソルゲを主人公にして、一九四一年の独ソ戦情報、日本の御前会議での南進決定という情報伝達をクローズアップし、ソルゲを「ソ連の愛国者」と扱う視角が支配的だった。ようやく冷戦崩壊・ソ連解体期に、ソルゲがソ連に送った通信記録そのものや「名誉回復」期の事情を示す記録が公開され、日本官憲史料との照合が可能になったが、ジョンソンの本書では、この新しい局面での新事実や史資料は使われていない。

つまりソルゲ事件は、戦前日本における軍国主義化・対ソ戦争の可能性をめぐる日ソ情報戦であつたにとどまらず、戦後のソルゲ事件報道・研究を含む各国での事件の取りあげ方が、それ自体情報戦であつた。ソルゲ事件をどのような視角からどのように回顧し記憶するかについては、各国・各情報機関、個々の研究者の狙い・思惑があり、それらがグローバルな国際情報戦として展開した。

単純化して言えば、アメリカでは一九三〇年代初めの中国・上海でのソルゲ・グループが東京での活動の準備期として注目され、ソルゲ事件と在外米国人・米国共産党のつながりが重視された。今日でも事件は、冷戦期スパイ合戦・反共マッカーシズムの文脈でイメーじされる。日本では一九三〇年代後半の軍国主義化と尾崎秀実の近衛内閣中枢にあつての活動が

「愛国者か、反逆者か」で注目される。ソ連の場合は一九四一年のソルゲのみを、大祖国戦争でロシアを救った英雄として取りあげる傾向が今日でも強い。

こうした中で本書は、ウイロビー報告と同じく中国大陸を射程におきながらも、日中戦争と民族解放闘争を政治的・思想的に重視した問題提起として独自の意味を持つている。

二一世紀に入って、英語圏では、米国立公文書館(NARA)やマッカーサー記念館、ゲティスバーグ大学のウイロビー文書、英国国立公文書館の日独外交文書、リッペントロップ文書などが機密解除で公開されており、デイキン・ストーリイ「ソルゲ追跡」を継承するロバート・ワイマント「ソルゲ 引裂かれたスパイ」(西木正明訳、新潮社、一九九六年)も刊行された。日本では、故石堂清倫、白井久也、渡部富哉らの日露歴史研究センターが六回の国際シンポジウムを組織し、その「ソルゲ事件関係外国語文献翻訳集」には、ロシア語やドイツ語で書かれた新資料・研究が次々に公開されている。当事国の一つ中国では、ようやく楊国光「ソルゲ、上海二潜入ス——日本の大陸侵略と国際情報戦」が刊行され、二〇〇九年に邦訳が出されたが(社会評論社)、二〇一三年九月には上海での第七回国際シンポジウムが計画されており、檔案館資料の公開が期待されている。本書は、グローバルなソルゲ事件の学術研究のための、一つの重要な礎石になっている。

二〇〇九年に、ジョンソン、ブランゲに続くアメリカで三冊目のソルゲ事件研究書、米国日本文学研究の権威であるトーマス・ライマー博士の編んだ「愛国者であると共に反逆者、

ゾルゲと尾崎』(Thomas Rimer, et al., *Patriots & Traitors, Sorge & Ozaki: Portland Merwin Asia 2009*)という学術論集が刊行された。ちょうどチャルマーズ・ジョンソン逝去の前であったが、木下順二『オットーと呼ばれる日本人』を全文英訳し収録したこの本に再録され、論集のベースになったのは、ウィロビー報告でもプランゲの本でもなく、ジョンソンの本書第一章であった。

アメリカでもようやく新段階のゾルゲ事件研究に、本書が基礎資料となったようである。日本のゾルゲ事件研究も、松本清張や尾崎秀樹によって作られた俗説を改め、新たな史資料条件のもとでの本格的研究が求められている。二一世紀に引き継がれたグローバルな国際情報戦のなかで、本書は重要な意義を持つであろう。

(早稲田大学客員教授、一橋大学名誉教授)

本書は岩波現代文庫のために翻訳されたオリジナル版である。

人名索引

あ行

相沢三郎 225
 アイスター大佐 310
 アイゼンハワー, ドワイト・D.
 iv
 アインシュタイン, アルバート
 87
 青地辰 11, 143, 172
 朝川判事 304
 浅沼澄次 276, 352
 芦田均 47
 阿部信行 225
 アベル, ルドルフ 339, 341
 甘柏正彦 44
 天谷直弘 349
 雨宮肅藏 199, 200
 荒畑寒村 41
 アリストテレス 176
 有馬頼寧 179, 180, 192
 安斎庫治 81-84
 アントーニウス, マーカス 376
 アンリ, M・アルセーヌ 353,
 354
 イカ(Ika)=リヒアルト・ゾルゲ
 110
 イカレット(Ikaret)=クリスティア
 ーネ・ゾルゲ 110
 都達夫 76, 77, 78
 生駒佳年 236, 270, 277
 石井花子=三宅花(華)子 viii, 21,

257, 342, 344
 石川達三 199, 200
 石原莞爾 114
 磯野清 358
 板垣征四郎 114, 190, 225
 市島清一 293
 伊藤憲一 327
 伊藤好道 45
 伊藤隆 347
 伊藤猛虎 260, 261, 320
 伊藤律 21, 22, 258-263, 304-309,
 312-315, 319-324, 326-332, 336,
 347, 348, 360, 365-367, 371-374
 稲葉秀三 170, 347
 犬養健 3, 20, 74, 81, 186, 196-198,
 226, 266, 301, 349
 犬養毅 3, 74, 127, 209
 井上準之助 127
 猪俣津南雄 43
 今田新太郎 114
 井本大吉 348
 岩崎五郎 261
 岩淵辰雄 265
 岩本巖 327
 股汝耕 147
 ウィットフォーゲル, カール・A.
 344
 ヴィーデマイヤー, イレーネ 87,
 88, 123
 ウィロビー, チャールズ vi, 4,
 26, 29, 94, 95, 115, 120, 147, 158-

ゾルゲ事件とは何か チャルマーズ・ジョンソン

2013年9月18日 第1刷発行

訳者 篠崎 務

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111
現代文庫編集部 03-5210-4136
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 製本・中永製本

ISBN 978-4-00-603263-0 Printed in Japan